

千里地理通信

関西大学地理学研究会会報 第52号

Newsletter of Geographical Institution, Kansai University

Contents

Page 1

巻頭言
なぜか違うのです
伊東 理

Page 2

実習調査報告
沖縄実習調査
河野 俊秀
日帰り巡検報告
東大阪市巡検
谷 真理子

Page 3

卒業生だより
私の社会人レポート
—旅行会社で働いて—
胎中 啓紀

学窓から

“自由な学び舎”
地理学教室での日々
畑 りつ子

Page 4 to 5

研究ノート
日本植民地時代における台北の市街形成過程と民族別居住分化
水田 憲志

Page 6 to 8

院生・学部生の業績(2004.1~2004.12)
教室だより

Page 8

事務局だより

Page 9

随想
私は文系ですから
木全 敬蔵

Page 10

随想
フランスに魅せられて
石原 照敏

Page 6 to 8

卒業生・修了生からの一言

地理学に限ったことではありませんが、ある事象に関して地域間で相違していることは明らかにできて、それらの違いが生じる(生じた)要因を明確にするのは極めて困難なことがしばしばあります。

今のところ「なぜか違うのです」としか言いようがないのですが、しかしその違いを知っているのと知らないのとでは、物事を考える上で、大違いであると思われる事象は少なくありません。また、相違の要因自体を詮索するよりも、その違いの意味するところやその違いと関連するところを考えたほうが面白いことも多々あります。

私にとって日本・イギリス・アメリカで「なぜか違う」面白いことのいくつかを述べることにします。

〔アメリカの大規模ショッピングセンターの不思議〕 アメリカの郊外(社会)を特徴づけるものの一つとして、百貨店が3店舗以上、サービス業を含む商店数が200以上、1万台以上の駐車スペースをもつような大規模ショッピングセンター(SC)があります。イギリスでは、こうしたクラスに相当するSCは10ほどあり、日本の郊外にも百貨店・スーパーなどを核としたSCがみられます。

日本・イギリスの大規模SCでは、スーパーもテナント入店しており、そこでは高額衣料等の買回品から食料品等の最寄品まで販売され、ほぼ完全なワンストップショッピングが可能となります。一方、アメリカの場合には、テナントが買回品商店に限定され、食料品を筆頭に最寄品を購入することはできません。アメリカでの食料品の購入は、3週間に1回のまとめ買いがモードと言われていることも考えると、なぜアメリカの大規模SCではスーパー等の食料品店を置かないのかが不思議です(ちなみにカナダは両方のタイプがある)。この点については、地理学者をはじめとして、多数のアメリカ人に聞きましたが、未だ私を納得させる説明を聞くことはできていません。

〔頑固なイギリス人の購買行動〕 複数の商業

地・商業施設を選択することができる大都市圏の消費者購買行動調査をみると、日本人もアメリカ人もいくつかの商業地・施設を使い分けして買物をするクロスショッピングが一般的です。例えば、日本の主婦が新聞の折り込み広告をみて、その日の買い物に行くスーパーを決めるなどは、その典型です。一方、イギリス人は、例えば選択(利用)可能なスーパーが多数あったとしても、それぞれの人は特定のスーパー・商業地だけをもっぱら利用し、頑固なほどにその買物先を変えようとしなない傾向があります。このことについては、スーパーストア間のプライスゾーンの相違・など、ある程度の説明ができそうな理由は考えられていますが、根本的なところはわかりません。

なぜか違うのです

伊東 理

〔買回品を頻繁に買物する日本人〕 私の印象かもしれませんが、アメリカの百貨店や大規模SCの来店客数は、時期によって極めて大きな違いがあります。また、アメリカの百貨店では、夏のバーゲンとクリスマスの時期で(両期間で1月)、1年間の売り上げの半分以上の売り上げを達成すると言われたりもします。そのためか、私は閑散とした大規模SC・百貨店の異様な姿を何度となく見ました。日本の百貨店も昔から、「2・8(ニッパチ)月はだめだ」と言われてきましたが、アメリカのクリスマスシーズン等の顧客の集中度合いは日本の比ではありません。イギリスは、中間で日本よりもアメリカに近い方です。百貨店などに頻繁に行く、買物好きの日本人といえるかもしれません。

以上のことなどは、各国の「(消費)文化や国民性の違い」といった説明も一部は可能でしょうが、私はそのようには言いたくありません。また、これらのこと自体をさらに詮索したいとも思いません。むしろこうした相違が、3国での小売商業の立地的相違や小売商業の変化とどのように関係しているのか、といった方向で考えてみたいと思っています。いずれも難題ですので、今のところは頭の片隅に入れて、大切に置いておくことにしています。(本学教授)

10月4日月曜日、私たちは那覇空港に降り立った。あいにく空には雲がかかっていた。だが、秋の模様を見せはじめ、少し肌寒かった大阪に比べ、ここ沖縄はまだ夏の気配がした。それぞれタクシーに乗り込み宿泊する那覇の沖縄不二ホテルに集合。軽いミーティングを行い各班それぞれの調査地へ出発した。

2004年度、我々3回生の実習調査は沖縄に決定した。従来は近畿周辺で調査を行っている。前期に1度1泊巡検を行った後、後期の実習調査につなげていくのである。だが今回の私たちの実習は異なっていた。前期に滋賀県湖東調査、そして今回の沖縄実習。調査地が違う。資料と言えは大学で集めることが出来るものばかり。今回の調査1回きりのため、各班とも事前の準備には万全を期していたと思う。そして事前に高橋・野間両教授が調査地への連絡を取ってくださっており、かなりスムーズに調査の作業が行えた。

今回の沖縄調査は4泊5日。だが後半の2日間は自由行動のため、班として行動できるのは実質3日。それも初日は昼からの調査となっていたために時間が無い。私は都市・交通班のため班員と野間教授と最初の目的地であるトヨタレンタリース沖縄那覇営業所へと出かけた。私たちの班は企業の方に直接話を伺ったり、外に出て



勝連城



ジャスコ沖縄店での調査風景

聞き取り調査などを行った。慣れない作業で最初は戸惑った部分もあったが、院生の指導のもと、どうにか作業を終えることが出来た。ホテルで他の班に話を聞くと、疲労を口にはするものの皆楽しんでいるように見えた。

3日間はすぐに過ぎ、4日目の自由行動の日。沖縄は自動車がないと不便なため、レンタカー店で借りて自然班の2人を除く3回生全員で観光をすることにした。沖縄通の舟越君が南部を中心に皆を案内してくれた。琉球王朝時代の遺跡やアメリカ軍基地など、自由行動にもかかわらずとても勉強になったものだった。

こうして私たちの沖縄実習調査はあっという間に最終日となった。これはとても充実していた4泊5日だったからであると思う。この貴重な体験は必ずこれからの課題である卒業論文の礎となるはず、これを必ず活かしていきたい。
(本学学部3回生)

日帰り巡検報告

東大阪市巡検

谷 真理子

2004年10月31日、秋も終わりに近づいた日曜日、東大阪市への日帰り巡検が行われた。

10時30分、集合場所の近鉄石切駅に着くと、巡検の概要の説明を受けて早速目的地に向かった。参加者は先生方や先輩方あわせて総勢30名ほど。その中で3回生は私ただ一人。若輩者の私が参加して大丈夫だったのだろうか、と若干の不安を抱えつつ、最初の目的地の辻子谷へと歩き出した。思っていたよりもハードな道りだったが、水車跡の説明を聞きながら歩くうちに、巡検の楽しさを知っていった。水車による町おこしをすすめる昭楠会の方々が水車を復元している現場では、作業中にも関わらず親切に案内して下さり、地域伝統の景観を守ってこうとする地元の方々の姿に胸を打たれた。

昼食の後、大正時代から続く野尻伸線場を見学し、当初の予定には組み込まれていなかったという鎮宅霊符神社へと向かった。私の卒論のテーマと関連のある神社だったので、この巡り合わせに驚き、高橋先生のご配慮で参加者の方に紹介して頂き、巡検に参加してよかったという思いを強めた。その後、バスで鴻池新田会所へ行

き、院生の方の説明を聞いた後に自由に見学することになった。面白いもので、参加者の方々の注目点は一様でなく、ただ見学するよりも、そういった地理の先輩方とお話しながらの見学は一人で見るよりも多くの発見と知識を得られるものだと学んだ。全体の挨拶の後ここで解散となったが、有志10数名ほどで東大阪市役所の展望台に行き、東大阪の町を一望しながら一日の巡検に思いを馳せた。

授業以外の巡検には初めて参加したが、出発の時に抱いていた不安は瞬く間に解消されてしまった。地理については未熟である私こそ、こういった巡検に参加して学ぶ意義があるのだと思う。普段は見られないような場所を見学したり、ふだんお会いできない方とお話出来たりと、とても有意義な時間だった。ぜひ、今後は学部生もたくさん参加して欲しいと願う。そして私自身、また参加したいと思う。最後に、今回の巡検を企画・案内して下さった案内者の方々、一人で不安だった道中、様々な勉強になるお話を聞かせて下さった先生方、先輩方に感謝したい。
(本学学部3回生)

卒業生だより

私の社会人レポート —旅行会社で働いて—

胎中 啓紀

昨年秋、伊丹空港で沖縄へ向かう地理学教室の現地調査の見送りに行き、懐かしい先生方、学生の皆様にお会いして自分が3回生の時の現地調査のことを思い出しました。早いもので、この春で卒業してから6年目を迎えようとしています。今回は、私の卒業後のレポートとして、現在の仕事について、少しお伝えしたいと思います。

2000年3月に卒業後、私は旅行会社のジェイティービー（当時は日本交通公社）に入社し、現在まで教育旅行大阪支店で勤務しています。旅行会社のイメージというと、皆様は駅前にあるパンフレットに囲まれたカウンターのある店舗などをイメージする方が多いと思いますが、私の勤務する「教育旅行大阪支店」はそういったカウンター店舗ではなく、高校や中学校などの修学旅行、語学研修、スキー実習、校外学習などの学校関係の需要を専門的に企画、手配、斡旋を行う支店で、私は大阪市内の私立学校を担当する営業マンをしています。

よく、「いろいろな所に行けるからいいなあ」などと言われます。実際その通りで年間多い年で、国内と海外合わせて60日から70日ぐらいの添乗業務があり、仕事

とはいえ、いろいろな地域へ訪問できることは地理学の徒としては本当に貴重な経験を得ています。

こういった、楽しいことがある一方、普段は非常に厳しく、激しい他社との受注競争があり、セールスバッグを片手に日々、各学校を訪問する毎日です。特に、修学旅行などの大人数の行事の入札は、オリンピックで試合に出るようなもので、1年に一回のこの大勝負は非常に気合が入ります。めでたく受注頂き、無事本番の旅行も終え、生徒から「楽しかった」や先生から「良かった、安心して行けた、ありがとう」などお礼を言われたときには本当にうれしく、やりがいを感じ、その喜びが今後の活力につながっています。

旅行という「形のないもの」を売っているので、会社の看板はあるものの、旅行が終わるまではお客様には自分自身を信頼していただかないといけません。まだまだ修行中ですが、より人として信頼され、地理学出身の強みも兼ね備えた、より良いご提案ができるような営業マンへと成長していきたいと思い、今後も奮闘していきます。

（ジェイティービー教育旅行・大阪支店、高橋ゼミ）

学窓から

“自由な学び舎”地理学教室での日々

畑 りつ子

地理学教室には個人の個性や興味を存分に活かせる自由な環境がある。専攻決定当初の図書館ガイダンスの時、ある先生が「図書館全体が地理の分野だ」と教えてくれた。私は訳がわからなかったが、とにかく「すごい」と思った。結果的に、地理はすごかった。産業、地形をはじめ、建築、測量など自分の興味に任せて、様々な学問に取り組むことができ、自らの知識や世界観を大きく広げることができた。そして、最も地理の自由さを感じたのが、子供の頃から大好きだった「鳥」をテーマに卒業論文を作成できたことだ。卒論作成にかけた約1年半、私は貴重な体験をいくつもすることができた。

私は、大阪城公園の渡り性カモ類を卒論のテーマにした。鳥は好きだったが、詳しい生態については全く知らなかった。しかし、何冊もの本を読み、現地でカモの調査を行っていくうちに、どんな種類のカモがどこにいて、何をしているのかが手にとるようにわかるようになった。毎回の調査結果が楽しみでならなくなった。現地での調査は29回行った。冬期、雪の中の調査もあったが、カモの個体数や行動の変化への強い興味と、何か新しい発見があるかもしれないという期待から調査に奔走した。時には、夜中の生態を調べるため、地理学教室の多くの仲間に手伝ってもらい、一晩中調査をしたことも

あった。同じ現地調査の楽しみや苦しみを理解してくれる仲間の存在が有り難く、協力してくれた優しさに感動した。資料と情報不足に行き詰まり、鳥類専門家や市の職員の方々に聞き取りもした。叱られたりもしたが、普段は話せないような人と話し、興味深い話を聞いたことがうれしかった。また、論文を読んだり、パソコンでグラフを作ったり、机上での作業も行った。

こうやって、大阪城公園のカモについて、現地調査や聞き取り、机上の作業などを融合して調べあげた。決まった方法はなく、自分の考えに基づき、どうやって調査をするか試行錯誤した。卒論作成には苦勞したが、担当の先生の温かい支援もあり、無事完成したときには達成感と喜びに駆られた。

私は地理学教室の自由な風土で新たな世界観を培い、ものごとの知識を深めることができた。地理の仲間や先生、調査関連で多くの人達と出会うことができた。そして、自分で1つのことを追究していく難しさや楽しさを感じることができた。地理学教室での日々で、自分の中に養われた多くのものをいつまでも忘れず、人生を歩んでいきたい。

（本学学部4回生、2005年3月卒業予定）

1. はじめに

この小稿では日本植民地時代の台北市における民族別居住分化について検討する。近代日本の植民地都市に共通する特徴として、居住分化に代表される現地社会と日本人社会の二重構造があげられ（橋谷，2004），地理学では（水内（1985），尹（1987），李（1992）などで植民地都市における民族別居住分化の形態が提示されてきた。台北における日本人と台湾人の民族別居住分化については西村（1939）や葉（1994）によって既に指摘されているため，本稿では台北の民族別居住分化の形態を市街形成過程との関連から考察し，また先行研究では取り上げられていない朝鮮人と中国人の居住地分布についてもあわせて提示する。

2. 台北の市街形成過程

19世紀末の台北には淡水河の交易集落に端を発する艋舺（まんか，後に萬華と表記），茶貿易の中心地で外国人居留地が設けられた大稻埕（だいとうてい），清によって築かれた台北城の城壁内を意味する城内の三市街が存在した（図1）。日本が台湾を占領した直後，台北城の城壁は撤去され，三市街の隙間を埋める形で市街の形成が進められた。三市街が接続した後は城内の東側から東南側と，大稻埕の東側へと市街が拡張されていった。1922年に市区の改変が行われ，市街中心部の64地

区に日本風の「～町」という名称がつけられた（図2）。町名が変えられた後も萬華，大稻埕，城内という地名は慣習的に用いられ，一般的に萬華は台北駅より南側で城内より西側の市街，大稻埕は台北駅より北で，線路より西側の市街，城内は三線道路の内側を指した。

3. 民族別居住分化

『台北市統計書』によると，1940年における台北市の人口は約35万人を数える。これを人口統計の項目別にみると，日本人が約10万人，台湾人約24万人，朝鮮人348人，中国人約1万3千人，中国人以外の外国人33人となる。各々の人口分布図を図3に示す（中国人以外の外国人については割愛する）。各図とも円の大きさを絶対的な数値（実数）をあらわし，円の濃淡で相対的な数値である特化係数をあらわした（特化係数については浮田ほか（2001），138頁を参照）。日本人や台湾人に比べて人口が少ない朝鮮人と中国人の分布図は，凡例の円の大きさがそれぞれ異なる。

日本人人口は城内とその周囲に20世紀以降に形成された市街に集まっており，萬華・大稻埕の旧市街にはほとんど分布していない。日本人によって占められた城内には台湾総督府をはじめとする庁舎や官舎が置かれ，また日本資本の企業が多数立地する政治・経済の中心地であった。しかし，日本人人口の半数近くは東門町をはじめ1930年代以降に形成された城内東南側の市街に分布しており，職住分離型の居住形態であった。

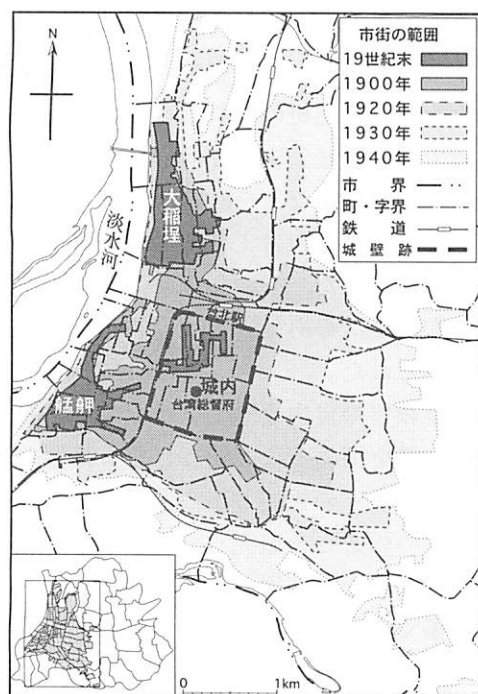


図1 台北市の市街形成過程
陳（1997），台北市役所（1930）による



図2 台北市街の町名（1922～1945）

台湾人は萬華と大稻埕の旧市街で人口の輻輳がみられる一方、日本人の特化係数が高い城内とその周囲では実数・特化係数ともに値が小さく、日本人と台湾人の居住分化が認められ、とくに萬華では19世紀末に市街が存在した淡水河沿いの地区と20世紀以降に市街が形成された地区で明確な分化がみられる。大稻埕では比較的旧い市街である日新町、太平町、永楽町、大橋町のほか、1930年代以降に市街が形成された台北駅北側の下奎府町、蓬萊町、宮前町でも台湾人人口の実数・特化係数が高くなる。前述のように萬華・大稻埕・城内の旧市街に付随して形成された市街の大部分を日本人が占めたが、新しく形成された市街のうち、台北駅の北側だけは唯一台湾人人口が卓越した地域であった。

朝鮮人は台北駅の北側に位置する建成町・上奎府町と萬華の入船町・有明町、市街南端部の川端町で特化係数が高く、1920年以前に形成された比較的旧い市街地への集住がみられる。入船町と有明町には当時「萬華遊廓」といわれた遊廓街があり、『台北市政二十年誌』には1940年4月現在として「妓楼の数25、娼妓220人(内朝鮮人42人)」と記載されている(桂川(2001)、橋谷(2004))。入船町の朝鮮人人口は男9人に対して女32人、有明町では男15人に対して女69人と、いずれも性比に大きな偏りが存在した。

中国人は総じて台湾人の分布傾向と類似しており、萬華・大稻埕の旧市街への集住がみられる。萬華の新起町と若竹町では台湾人の特化係数が低い一方で中国人の特化係数が高いが、この理由については現在のところ詳らかにしえない。日本植民地下の台湾では労働力不足を補うために中国人労働者の台湾渡航を制限つきで認めていたが、日中間の戦争が激化する1930年代後半以降は台北市内でも中国人に対する排斥が激しくなり、中国人人口は減少する傾向にあった。

4. おわりに

この小稿では紙数の都合もあって1940年における居住分化の形態を提示するにとどまったが、今後はこのような居住分化の形態が50年間でどのように変遷したのか、また居住分化が台北の都市社会政策にいかに関与したか、といった問題を明らかにしていきたい。また、筆者はかねてより台北在留日本人を悉皆的に収録した住所録の分析を進めており、この小稿で得た居住分化の形態との比較について、いずれ別稿にて報告したい。

(本学大学院・文学研究科博士課程後期課程)

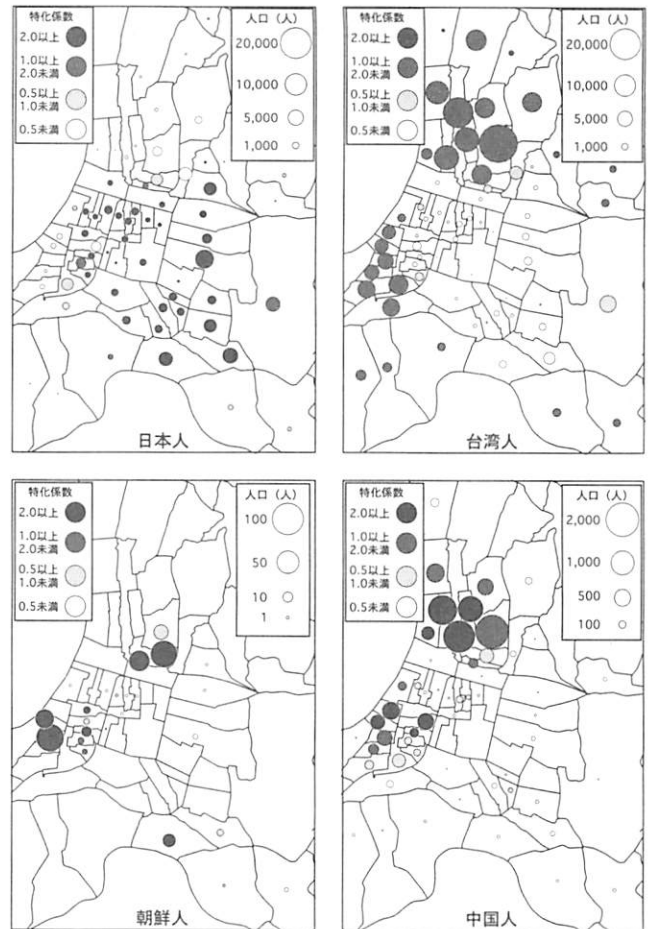


図3 民族別居住分化(1940年)
『昭和十五年版 台北市統計書』による

【参考文献・資料】

- 浮田典良・池田碩・戸所隆・野間晴雄・藤井正(2001):『ジオ・パル21—地理学便利帖—』, 海青社
- 桂川光正ほか(2001):『近代社会と売春問題』, 大阪産業大学産業研究所
- 台北市役所(1930):『台北市十年誌』
- 台北市役所(1940):『台北市政二十年誌』
- 台北市役所(1940):『昭和十五年版 台北市統計書』
- 陳正祥(1997):『台北市誌』, 南天書局(台北)
- 西村睦男(1939):『台北市の地理学的研究』, 地理論叢 10, 169-222.
- 橋谷 弘(2004):『帝国日本と植民地都市』, 吉川弘文館
- 尹正淑(1987):『仁川における民族別居住地分離に関する研究』, 人文地理 39(3), 87-101.
- 葉倩璋(1994):『日本植民地時代における台北の都市計画』, 経済地理学年報 40(3), 38-55.
- 葉倩璋(2001):『植民地主義と都市空間—台北における権力と都市形成—』, 竹内啓一編『都市・空間・権力』, 大明堂, 34-76.
- 李惠恩(1992):『1930年~1935年の京城府(ソウル)における民族別居住地分化の変遷』, 歴史地理学 160, 2-20.

卒業生・修了生 からの一言

史地 01-45

北野 航
四年間、地理学教室で学んだことを少しでも社会で生かせるよう頑張りたいと思います。有難うございました。

史地 01-55

黒木智恵子
興味のあるテーマをフレキシブルに学べたこと、味のあるステキな仲間に出会えたことが、大学生活、地理生活における最大の収穫であり、最高の喜びです。

史地 01-61

小山 敦
1 回生から数えて早 4 年。ご指導して下さいました。ありがとうございました。何とか巣立できました。

史地 01-113

西村親子
地理って何かは上手く言えませんが、地理ですてきな先生方と楽しい友達に出会えたことはとても感謝です。

史地 01-120

畑りつ子
地理の醍醐味は実体験の面白さだ。私は現地調査の楽しさと難しさを知り、その気持ちを共有できる友を得、幸せだ。

史地 01-127

東山崇広
大学生生活の 4 年間はなんやかんやであっという間でした。この個性的な地理学教室に在籍できたことを大変ありがたく思います。

史地 01-139

堀内進也
実習、ゼミ、卒論といろいろ大変でしたが、振り返っ

院生・学部生の業績 (2004. 1~2004. 12)

岡田良平：「東北タイ農村における学校と生徒の意識変化」関西大学史学・地理学会 2004 年度大会 (口頭発表)

尾崎美佳：木庭元晴・森本英揮・尾崎美佳「北摂山地・茨城市域およびその周辺で見出された多数の大規模な岩盤地すべり」日本地理学会春季大会 (口頭発表) 2004 年 3 月

片岡健一：茨木市史編さん委員会編『新修茨木市史第 8 巻史料編地理』(編集補助)

北野 航：「茨木市における森林植生の境界-地形・地質などの自然要因及び字境界にみられる人為的要因-」関西大学史学・地理学会 2004 年度大会 (口頭発表)

生地泰明：「戦後期北陸繊維産業の展開」関西大学史学・地理学会 2004 年度大会 (口頭発表)

畑りつ子：「カモ飛来地としての大阪城公園の環境特性-主要種キンクロハジロとホシハジロの生態と地域環境に基づいた生息地選好-」関西大学史学・地理学会 2004 年度大会 (口頭発表)

松井幸一：「近世城下町における分類」関西大学史学・地理学会 2004 年度大会 (口頭発表)

水田憲志：「日本植民地時代末期の台北市における日本人商工業者」関西大学史学・地理学会 2004 年度大会 (口頭発表)

森本英揮：木庭元晴・森本英揮・尾崎美佳「北摂山地・茨城市域およびその周辺で見出された多数の大規模な岩盤地すべり」日本地理学会春季大会 (口頭発表) 2004 年 3 月、「北摂山地で見出された多数の大規模な岩盤地すべり」関西大学史学・地理学会 2004 年度大会 (口頭発表) 2004 年 12 月

● ● ● ● 教室だより ● ● ● ●

■研究会主催の日帰り巡検は、2004 年 10 月 31 日 (日)、「水車動力利用の工業地域の形成」をテーマに、下記のコースで東大阪市域を回りました。

近鉄石切駅-辻子谷-正興寺山公園-額田谷-暗越奈良街道-東高野街道-奈良街道交差点-近鉄新石切駅-JR 鴻池新田駅-鴻池新田会所-JR 鴻池新田駅-東大阪市役所総合庁舎-近鉄東大阪線荒本駅で解散。

現地案内は大学院生 (M1) の岡田良平、堀内千加、森本英揮、吉兼崇博と東大阪市文化財協会の別所秀高氏でした。

■「地理学実習」による 3 回生の調査を、10 月 4~8 日の 4 泊 5 日の日程で、沖縄県那覇市とその周辺で実施しました。木庭・高橋・野間の 3 教員と 20 名の 3 回生、博士課程前期課程大学院生 8 名、博士課程後期課程大学院生 1 名の総勢 32 名と、琉球大学助教授で関大 OB でもある西岡尚也先生とその学生が参加しました。2 月末には報告書『那覇市とその周辺の地理』が刊行されました。

■2004 年 10 月 30 日~2005 年 1 月 2 日の期間、日本学術振興会外国人招へい研究者 (短期) として、ベトナム国家大学ハノイ理科大学地理学部長のグエン・カオ・フアン (Nguyen Cao Huan) 氏が関西大学地理学教室で研修されました。テーマは「ベトナムにおける人文地理学拡張のための方法論、カリキュラム、人的資源、IT の整備に関する研究」で、受け入れ教員は野間晴雄教授でした。12 月の関西大学地理学研究会例会で成果を発表していただいた

ほか、人文地理学会、インターシティ研究会、追手門学院大学、佐賀大学低地研究センターとも交流をもたれました。

■第 86 回例会 (研究例会) が昨年 12 月 11 日 (土) に関西大学地理学教室で行われました。発表者は賀納章雄 (博士課程後期課程)「南島における伝統的畑作穀類栽培の展開」、榎田雄一 ((株) 武揚堂)「地図と私」、Nguyen Cao Huan (Faculty of Geography, Vietnam National University, Hanoi, Visiting Professor of Kansai Univ.) *Development of Geography in Vietnam: A Framework Analysis* でした。また、研究会終了後、同所で恒例の忘年会が行われました。

■関西大学非常勤講師として、ご出講していただいた杉本尚次、坂本英夫、石原照敏、木全敬蔵の 4 先生が、非常勤講師定年規定で今年度末で退かれます。長年の学恩に感謝いたします。

■伊東教授は、後期、国内研修 (課題「イギリスにおける小売商業の地域構造の変化に関する研究」) で講義等はありませんでしたが、2005 年度は復帰して、3 回生演習、実習、卒論演習等を担当します。

■2004 年 8 月~2005 年 2 月までの教員の海外出張は以下の通りでした。伊東理：日本学術振興会科学研究費による「イギリススコアシティのシティセンターの再生に関する資料調査」(2004 年 8 月 30 日~9 月 12 日、イギリス)、日本学術振興会科学研究費による「アメリカ合衆国大都市圏の産業立地動向に関する現地調査」(2004 年 10 月 23 日~11 月 7 日、アメリカ合衆国)、野間晴雄：「IGC 大会イギリスグラスゴー参加

及びマレーシア資料収集」(2004年8月15日～8月24日)、日本学術振興会科学研究費による「ドンデーン村の変容調査」(2004年9月3日～9月15日、2005年2月23日～3月1日、タイ)。

1 泊バス巡検のご案内

今年も「地理学実習」を兼ねた恒例のバス巡検を下記のように実施いたします。今年は早くに予定が決まりましたので、会報で案内させて頂きます。そのため、改めて葉書でのご案内は差し上げないことお含み置き下さい。

日時：2005年6月4日(土)～6月5日(日)

日帰りまたは1泊2日

巡検地：紀ノ川河谷と高野山(和歌山県岩出町・粉河町・高野町・高野口町ほか)

集合：JR 新大阪駅 団体待合室 8時45分集合(厳守) 雨天決行

午前9時には出発します。1日目昼食は弁当を用意します。

コース：6月4日(土) バス巡検

JR 新大阪駅-阪神高速道路-近畿自動車道-阪和自動車道-泉南インター(根来街道)-和泉山脈(地形)*-根来寺(昼食)*-岩出町民俗博物館*-青州の里*-名手市場*-みかん園(断層・段丘地形、農業的土地利用)*-高野口町(パイル生地工場、資料館)*-九度山駅*(一時解散)-高野山大円院(宿泊) 17時30分頃着 宿舎でコンパ *は下車地

6月5日(日) 徒歩見学

高野山大円院9:00-高野山町内(金剛峰寺)-奥の院-高野山(見学後、昼食前に解散)-ケーブル高野山-ケーブル極楽橋(南海高野線で各自、大阪方面へ)

宿泊先：宿坊 大円院(高野山上)

TEL 0120-56-2009

費用：日帰り2000円(バス・高速通行料、1日目の昼食代)、一泊14000円(宿泊、朝食・夕食、コンパ)★帰りの高野山からの交通費と2日目昼食代は自己負担

申し込み：卒業生は大学地理学教室の伊東理宛に葉書か、メール(osamu@ipcku.kansai-u.ac.jp)で5月23日(月)までに申し込み下さい。日帰り、一泊どちらでも結構です。日帰りの場合、遅くはなりますが大阪までバスで戻れます(無料)。

卒業生の動向

■片上廣子さん(本学大学院博士課程後期課程)が『近世蝦夷地の水産業の地域的展開と地域の形成』で2004年9月文学研究科より博士(文学)の学位を授与されました。主査は伊東理教授。

■卒業生(木庭ゼミ)の松本太氏(立正大学地球環境科学部・ポストドクター研究員)が以下の研究で3つの奨励賞を受賞されました。(1)2003年10月「熊谷市における都市気候と植物季節の関係(第1報)-イチヨウ、イロハカエデの紅(黄)葉日を例として-」(『日本生気象学会雑誌』,第39巻第1号,pp.3-16)で日本生気象学会研究奨励賞,(2)2004年5月社団法人・環境情報科学センターより、「ソメイヨシノの開花に及ぼす都市の温暖化の影響-花芽の成長過程に着目して-」(『環境情報科学論文集』,第17巻,pp.41-46)で論文奨励賞,(3)2004年6月、立正地理学会より,(2)に対して、田中啓爾記念地理学奨励賞。また氏は『植物季節に及ぼす都市の温暖化の影響-埼玉県熊谷市を事例として-』で、平成16年3月に立正大学より、博士(理学)を授与されました。

■卒業生で、三重県立稲生高校教諭、三重大学大学院在籍中の森眞一郎氏から下記の別刷を御恵贈頂きました。

森眞一郎・須賀忠芳・高橋伸雄・布川あや子

「地域における世代間交流活動に果たす学校の役割 -福島県小野町雁股田地区を事例として-」,新地理50-3,2002,pp.10-20.

森眞一郎「沖縄県離島における養殖モズク産地の形成 -沖縄県伊平屋村を事例として-」,地域漁業研究43-3,2003,pp.23-43.

森眞一郎「簡易な実験と写真教材を活用した地形の学習」,新地理52-1,2004,pp.25-35.

森眞一郎「沖縄県伊平屋村における養殖モズク生産労働をささえる地域的条件」,新地理52-3,2004,pp.1-19.

学会案内

関西大学で4月に以下の学会が開かれますので、非会員の方もふるってご参加下さい。聴講は無料です。

一人文地理学会 第254回例会

日時：2005年4月16日(土)

13時30分～17時30分

会場：関西大学天六キャンパス2階201教室
大阪市北区長柄西1-3-22

(阪急電鉄千里線・地下鉄谷町線および堺筋線「天神橋筋六丁目」下車⑤出口北へ徒歩5分)

てみれば楽しい思い出です。地理を専修してよかった!

史地 01-145

正田真一
調査方法や基準を悩みましたが、先生の親切なご指導のおかげで、楽しく有意義に卒業論文に取り組みました。

史地 01-185

米本慶子
友人にも恵まれ、先生方との距離も近く親身に指導していただき、楽しい大学生活を過ごすことができました。

史地 03-3001

二本柳亮
卒論を書くことで論理的思考力がつき、自分の意見を主張できるようになりました。今後この力を伸ばしていきたいです。

史地 99-32

小田真玄
地理学実習では一生懸命取り組めたので、本当に楽しくていい思い出になりました。お世話になった教職員の方々本当にありがとうございました。

史地 99-124

水上洋子
非常勤講師による地形学の教養必修科目を創設してほしい。

史地 99-135

柳本大輔
二年間が決して遠回りでなかったと感じられる充実した一年でした。ありがとうございました。

史地 97-80

高林直澄
8年かかりましたが卒業することができます。先生や職員の方々、本当に長い間ありがとうございました。

2 史地 01-5

駒田剛史
授業及び指導をして下さった先生方と共に学びあった人達、図書館の充実が、学校生活を爽り豊かなものにできました。本当にありがとうございました。

2 史地 01-7

谷川喬人
地理を学んで視野が広がりました。卒業にあたって、たくさんの人にお世話になりました。

2 史地 01-15

吉岡浩史
卒業という日を迎えることができたのは自分の力だけでなく親や先生、友人たちの協力だと思っています。人は一人では生きていけないと感じた四年間でした。皆様本当にありがとうございました。

2 史地 03-3003

松原道子
関大で学んだ2年間、視点を変えることで身近な生活にも多くの発見がありました。今後も柔軟さを大切にしていきたい。

02 M 2701

中西 浩
関大地理の皆様の暖かい支えで今春修了します。一般社会では得られない仲間の連帯や人脈の中で幸せな3年間を過ごし感謝しています。

03 M 2702

前田 倫
親・仕事・研究の三足の草鞋を履いた修士課程。二足が途中で脱げかけて捨てて貰って三足履いてゴールイン。

連絡先：TEL 06-6368-1489 (野間晴雄)

noma@ipc.kansai-u.ac.jp

テーマ：鉄道と地理の愉しみ

三木理史 (奈良大学) 「鉄道写真」の誕生
- 風景発・戦争経由・鉄道行 -

川島令三 (鉄道アナリスト) 関西と関東の電車

青木栄一 (東京学芸大学名誉教授) 鉄道の歴史地理学への模索 - 私のたどってきた道をふりかえって -

ミニウォーク：例会終了後、会場から天神橋筋六丁目周辺を45分ほど歩いて案内します。

案内は水谷彰伸 (関西大学・非常勤講師) ほか関西大学博士後期課程院生、無料。

一経済地理学会関西西部会・4月例会一

日時：2005年4月23日 (土)

14時~19時30分

会場：関西大学 100周年記念会館

テーマ：若手研究者の関心と経済地理学の近未来

内容：報告者とタイトルは学会HP参照

交流会：17時半から大学内レストランのポンブラットにて若手研究者 (大学院生など)

の交流会と会員懇親会を立食パーティー形式で開催します。非会員の参加も歓迎。院生・学生の参加費は1500円。希望者はメールで伊東理 osamu@ipc.kansai-u.ac.jp まで。

長年にわたり、本学の非常勤講師としてご出講いただいた京都大学・関西学院大学・神戸学院大学名誉教授の浮田典良先生が、2005年1月12日、膵臓がんのためにお亡くなりになりました。先生は日本地理学会会長、人文地理学会会長を歴任されるなど、わが国の地理学の発展に大きな貢献をされました。飾らぬ親しみやすいお人柄で、本研究会の例会にも何度か顔を出され、有益なコメントをいただきました。また、先生の蔵書の一部を地理学教室に御寄贈下さり、受講大学院生をご自宅にお招き頂くなど、大変お世話になりました。長年の学恩に感謝するとともに、謹んで哀悼の意を表します。
なお3月には、ナカニシヤ出版から自ら描かれた主題図に解説を付された『地図表現半世紀』が刊行されましたので、関心のある方はご覧いただければ幸いです。

● ● ● ● 事務局だより ● ● ● ●

【読者の皆様へ御願い】

今号の千里地理通信とあわせて“郵便振替払込書”を同封いたしております。本通信の内容充実と関西大学地理学教室の運営のためにもお

手数ですが、1年分の会費1,000円をお近くの郵便局から為替でお振り込み下さい。複数年まとめてお支払いいただくと助かります。

振込先：00970-4-81149 関西大学地理学研究会

原稿募集

以下の原稿を募集しております。

1. 【卒業生だより】
卒業生の方からの近況報告等を募集しております。内容は問いません。(字数 800 字前後)
2. 【学窓から】
現役の学部生・院生の方から募集しております。日頃の学習・研究活動の様子をご報告下さい。(字数 800 字前後)
3. 【研究ノート】
日頃の研究の成果を発表してみませんか。(字数 1,500 字以内、図・表・写真可)

【卒業生だより】や【学窓から】にも図・表・写真は貼付できます。詳細は会報担当教員(野間晴雄・木庭元晴)までお問い合わせ下さい。多くのご投稿をお待ちしております。

尚、ご投稿される方は、本文と図・表・写真等を別々にして、研究室の情報担当者(大学院生)にお渡し下さいますよう、願います。

立正大学を皮切りに、奈良大学、愛知大学、立命館大学、関西大学の地理学科で測量に関する科目の講義を担当してきた。奈良大学以下の4大学の学生からは、計算問題を課すと必ず、「私は文系ですから」と云う声が出た。立正大学では写真測量の講義を担当したが、測量学を担当された中央大学工学部の先生が、一般教養で数学の単位取得を受講の条件とされていたので、写真測量の受講生も「私は文系ですから」と云うものはいなかった。

私が高校へ入った時、入学式前にクラス分けの為のテストがあり、文科、理科のどちらを希望するかも書かされた。なんとなく理科志望と書いた。大学進学希望者は1~4の4組、1、2が文科、3、4が理科と云う組み分けが決まり、クラス分けテストの成績で奇数組、偶数組に分けられた。文科、理科と言いながら生物と化学の実験室使用の都合で、1年で化学を選択した者が理科組で、生物を選択した者が文科組だけのことであった。2年生に文科組が化学、理科組が生物と入れ替わり、物理は実験がなく普通教室でおこなわれ、結局3年間で学んだ科目は文科も理科も変わりなく、担当教官が違っていただけでなかった。

同級生の進学先を見ると、文科組から医学部、工学部に進んだ者も多く、また理科組から、法学部、経済学部に進学した者があり、理科、文科のクラス分けは全く無意味であった。其の頃は進学適性検査を受けていないと、国公立大学受験は出来なかった。私は現役と浪人の2度適性検査を受けた。午前は文系問題、午後は理系問題で2度とも文系理系同点でどちらが得意とは言えなかった。相撲界では、右四つ左四つどちらの組み手でも相撲が取れることを「ナマクラ四つ」と云うそうだ。さしずめ私は「ナマクラ文理系」であろう。

従って「私は文系ですから」という言葉は私の理解を越える言葉であった。ところがあるとき信じられない話を聞いて仰天した。某高校の数学教師は、文系のクラスで数学の時間に英語の大学入試問題集をやらせている、と得意そうに職員会議で発言した、と云うことである。さらに仰天することは、その高校の管理職はそういう教師を進学指導に熱心な教師として高く評価するのだそうだ。母校の校長になった同級生に、そんなことがあるのかと問いただすと、PTAや同窓会幹部が喜ぶのでね、と否定はしなかった。

私立文系の大学では、入試科目が多くても英語、国語、社会の3科目。理科、数学の2教科4科目を捨てて、3教科3科目に的を絞った方が受験勉強の効率がよいように見えるが受験生が全てそうなら、むしろ競争は激化するのではないだろうか。5教科8科目受験の国立大学受験生に比べれば、3教科の受験生は各教科に2倍以上の時間を割くことが出来るので、文系大学生、自称文系の高校生は、理科、数学を放棄した代償として英語、国語の成績が5教科8科目の受験生を大きく上回らないと辻褃合わない。

ところが、学習到達度の国際調査で、日本の読解力は大きく低下したことが明らかにされた。文系受験生が増えているのに何故だろうか。

奈良大学で、おなじ時間帯に地球科学の講義を担当してられる元京大教授の西村進先生は、理学部の入試は国語だけで十分と主張してられる。読解力が無いものは問題の意味が解らない、書くことが出来ないものは、自分の意見を発表することが出来ない。高校で読み書きをキチンと訓練してくれば、学問は我々が責任をもって指導すると云う御意見をもってられる。西村先生の意見を長崎大学で数学を教えている友人に伝えたら、「全く同感」と云う返事が返ってきた。

身内や友人に高校の国語の元教師が複数いる。詩、短歌、俳句の世界で、府県内では有名であることが優れた国語教師であり、次に源氏物語をスラスラ読み、文法の説明が巧みなことが良い教師の条件として挙げられるようである。

読むこと、書くこと、話すことの訓練が必要なことを国語の教師に向かって主張すると嫌な顔をされる。文を作る才能に乏しい教師は、ひたすらに大学入試対策に精力を傾けるしか立場がなく、日本語の教育は疎かにされている。

英語教育については、侃侃諤諤の議論が展開されているが、国語教育についての議論は殆ど聞かれない。理科、数学を捨てた高校生の為に、読み書きと話すことがきっちり身に付く日本語訓練の実施を期待したい。「私は文系ですから」の言葉が、計算が出来ない言い訳ではなくて、美しい日本語を書き、美しい日本語を話すことが出来ます、と云う意味に変わって欲しいと切に願っている。

(関西大学非常勤講師、元・奈良国立文化財研究所)

随想

私は文系ですから

木全 敬蔵

私がフランスを意識し始めたのは地理学によってではない。実は、十代の後半に、19世紀市民社会のフランス文学—グロノーブル生まれのスタンダールが、小説『赤と黒』の中で描いた、個人主義にめざめた青年の、ジュラ地方小都会の社会風俗への風刺と抵抗、モーパッサンが『女の一生』の中で描いたノルマンディーの風物、人間の深い孤独と悲哀—に魅せられたことによる。第二外国語をフランス語に選んだのもそのためである。

その後、大学で地理学を専攻しようかどうかと迷っていたとき、ポール・ヴィダール・ドゥ・ラ・ブラーシュ『人文地理学原理』を読んで印象に残った「場所の異なるに従って相違を示している千態万様な社会相」に興味をいただき、結局、人文地理学を専攻することとした。しかし、フランス地誌を研究するようになったのは、日本の地域研究の過程で、外国との比較が気になり始めて、当時日本と同じく地域格差の激しかった先進国・フランスを研究して、日本と比較すれば有効性があるのではないかと思うようになった7・8年後のことである。

1965年に、拙稿「アルプス経済の地域性格」を『人文地理』に掲載していただいた。実は、この拙稿が機縁となって、1973年に文部省科学研究費（海外学術調査）による「西南ヨーロッパ重層言語地帯の調査」の一員に加えていただき、夢にまでみた憧れのフランスの地を踏みしめることができた。私に与えられた研究テーマは「過疎と移動放牧に関する調査」であり、私は主としてピレネーの調査を試みた。

フランス・ピレネー東部は当時、移牧が衰退しつつあったが、観光地化が進まず、人口の老齢化・地域衰亡型を示していた。ところが、ピレネー調査のついでに訪れたフランス・アルプス北部では20世紀の中葉まで人口は減少したが、その後、観光地化とともに人口が増加に転じ、人口の若返り・地域発展型を示していた。当時、日本では過疎が深刻になっていたので、いったん人口が減少した後、人口が増大に転じたこの事例は大変興味深かった。アルプス地域調査の必要性が痛感されたが、それが実現するまでにはその後25年をまたねばならなかった。

アルプス農牧（移牧）地帯の観光地化との比較を念頭において、日本の中山間農業地域の観光地化について研

究した後、1999～2000年度に科学研究費補助金によりアルプス地域を調査する機会が訪れた。この調査では観光業と農業の共生システムが確立しているかどうかの仮説を実証しようとしたのであるが、それは次の理由による。この共生システムが確立していることにより、農牧業のつくりだす緑の景観が夏季観光の発展や環境保護に役立つとともに、観光業の発展が農家民宿や観光業への雇用を通じて農家の維持・存続に貢献し、地域の持続的な発展が可能になると考えられたからである。

1999年夏の調査地サヴォワ県ヴァロワールのように、フランス・アルプスは過度に観光地化されていて農業は衰退し、観光業と農業の共生システムの伝統的形態は一般的にはすでに崩壊していた。それどころか、既存集落から遠い、森林限界線より高位のかつてのアルプ放牧地にスキー・リゾート地が形成されているところが多

く、一般的には観光業と農業は切り離されていた。しかし、まだ農業が残っていたサヴォワ県ヴァルモレルというコミューンで、地域開発契約によって観光業と農業の共生システムの新しい形態（一種の地域契約経営）が構築されているのをやっ

とつきとめ、1999～2000年冬にそこを訪

れ、観光業と農業の共生システムの新しい形態の事例調査を行うことができた（科学研究費補助金・研究成果報告書『アルプスにおける観光業と農業の共生システム』2001年）。この新しい形態は、まだ農業が残っているが、観光にも適した日本の中山間農業地域に観光を導入して地域の持続的発展を図ろうとする場合に、地形や農耕形態の相違を勘案すれば、一つのモデル（ヴァルモレル・モデル）として有効性があるのではないかと考えると大変興味深い。

（岡山大学名誉教授、本学大学院非常勤講師）

随想

フランスに魅せられて

石原 照敏

千里地理通信 第52号

2005年3月19日 発行

関西大学文学部地理学研究会

〒564-8680 吹田市山手町3丁目3-35

関西大学文学部地理学教室内

Tel: 06-6368-1121(内線4890:大学院生室)

e-mail: moto@ipcku.kansai-u.ac.jp

URL: http://www2.ipcku.kansai-u.ac.jp/~moto/kyoshitsu_site.htm

郵便振替: 大阪 00970-4-81149